馬鹿と場華①

書店入口近くのコーナー

目立つ「バカ○○」「アホ△△」のタイトル本。

どれも、著者の顔写真が表紙の帯に。

売れっ子やお馴染みも。

タイトルだけなら、頭の隅にある「愚管抄」。

平成の書は、他者をバカ、鎌倉古典は著者が自著を卑下。

取り敢えず、バカとアホの定義は横に置く。

人様をバカ・アホ扱いにするなら、

指弾（書弾？）する著者に知性的な顔を期待するが、

バカ・アホを論ずるには、それなりに、

同類か同等でなければならない愚管顔。

だが、皆さん顕示欲は旺盛な面構え。

年末は「日産のゴーン会長逮捕と拘留」のニュース。

経済界・実業界でも、バカを１０年もやれば、

破綻が来ることが実証された。

例外がある。

評論家と政治家と学者と裁判官の世界。

小説家、ジャーナリストやタレントは論外としても、

この世界では、バカを真面目に１０数年やっていれば、

見返りに箔が付き、それなりの居場所を確保でき、

メシも食え、舞台が場華となる。

また、評論家とかジャーナリストなどは、

メディアが思いつくままの呼称であるか、

自称の類であり、ならば、市民活動好きなら、人権派なら、

「愛人家」と表現すればよい。

世に言う：評論家とジャーナリストの銅像は、

右も左も世界のどの国にもない。

バカには、さらに上がある。

大国や小国に存在したり、現存する独裁者。

超法規で自国民の生命さえも堂々と虐殺破壊し、

愚行が大きいほど、大衆からは、

尊と敬を両手にして崇められるのが歴史的・今日的事実。

さて、カルロス・ゴーン

Carlos Ghosnとあり、民族として属するレバノンでは、

ゴスンに近い発音、他国ではゴーンで認知と

納得しがたい説明もある。

名前にも、ややこしさが付きまい、

日本読みにゴースンがいい。

いつも真実を追求すると威張るメディアも、

Ghosnと知り、名前表記には苦労している。

それにしても、社難続きの日産。

プロの経営者が不在で、プロがいても、それは犯罪者。

(刑法上、未だ、罪名・罪科は確定せず、犯罪者ではないが)

カリスマ経営者と持ち上げられ、

裏で2万人？の首を切り、その家族も路頭に放り出した。

オトナシイ日本と日本人だから済んだが、

他の法治国なら、本家ルノーでなら、

デモに明け暮れ、彼は、虐殺者呼ばわりされ、

糾弾されていた。

だが、裏があるかも知れない。当初、首切りのための

彼は「殺し屋」として雇われ、カリスマで化粧され、

歓呼で舞台にあがり、やがて役割に気づいた彼は居直り、

ゆすり・たかりで雇い主を脅かし始める。

そこで、今は無罪を当然に主張し、

日産に損失を与えていないと居直る。説得力はない。

黒を白と言いくるめてきた、連戦練磨の頭脳の持ち主。

ルノーとフランスが送り込んだ善玉「怪盗ルパン」変じて、

悪玉「会長ルパン」に翻弄される受け入れ国日本の苦悩。

外国人は、「すみません」と言って、

自己の罪を絶対に認めたりはしない。

確たる証拠があっても認めない。

それが故に、

外国裁判制度では、好きなように主張させ、

司法権力により**タイミングよく**断罪し、

有無は言わせない。

日本のように、「ダラダラやズルズル裁判」はない。

タイミングの良さとその厳粛さが、裁判長の腕の見せ所。

陪席の出る幕でもない。

従って、海の外では、あちらでは、

罪とは、認めるものではなく、認めさせるもの。

だが、外人崇拝で、外人ならすぐに信頼する日本人。

１９７０年の大阪万博では、

外人と見れば、サインをねだり歩いた日本人。

当時、海外メディアはこの奇習を母国へ報道している。

日産も、同社一丸での「おねだり」と「サインねだり」が、

やがて、思いもかけない哀れな結果に。

小池都知事は、昨年末、尊敬するゴーン氏との

新年インタビューを企画。

年上との会見には苦手な知事だが、年上のお姉さまとして、

甘たれ声で、チャラチャラ会見を予定していた。

が、彼が、その会見の直前に逮捕され、

彼女は自己の政治的生命終焉に直結したであろう危険から、

危機一髪での回避行動ができた。

専守防衛が国是の元日本国の防衛大臣である。

これで、

レバノン産いのしし男と、ファースト好みの白壁女性の

亥年の年頭を飾る予定の妖怪インタビューはお流れ。

我々の年代なら思い出す日産の先行した破壊者の

塩路一郎自動車労連会長。

組合へは顔も出さず、葉山で所有するヨット三昧と、

暇に任せて、日産の経営や人事に口を出し、

有能であろうが歯向かう人材を放り出し、

経営機構はガタガタに。

それでも、今なお日産があるのは、世界に誇れるであろう

優れた現場と優れた人材の支えがあったから。

経営力は問題だが、生命力はある会社である。

だが、他人をとやかく言うのは簡単だが、

自分自身を振り返れば、バカと無縁ではない。

散歩路に、今は少ない「ソロバン塾」のボロ看板。

京都は丹波の田舎の小学低学年時代がよみがえる。

上級生がソロバンを廊下で転がし競争。

それにヒントを得て、

教材用の大型ソロバンに片足を乗せ、スケート遊び。

見つかったのか、チクられたのか、

優しくきれいな女性のM先生からの注意。

思えば、古風にして頑丈な造りのソロバンであった。

遊びの種類の少ない戦後の時代は、

この種の悪ガキの愚行を止められない。

イデオロギー的に言えば、「時代が悪い」のである。

ついに、母親も、多分「推定共犯者」扱いで呼び出され、

イエローカードである。イエローなど効力はない。

ついに、「本当の赤鬼」をみたことはないが、

学校で一番怖い、「赤鬼」と言われていた、いかつい

特に名を秘すN先生（本名：中村、教頭、日本国籍）

への出頭を命じられる。

酒を飲んでいるような、眉毛も太く赤ら顔、

実際、呑んでおられていたかも。

ついに、赤鬼からのレッド・カード寸前の事態。

ドラマチックに再現すると、

N先生、ぎょろりとした優しい目で、

にこやかに「ソロバンを足で遊ぶのはやめような」と。

「はい」の一発回答で非行と暴走からの立ち直り。

担任ではないこの先生は、

小生が4年の秋に神戸へ転校後、わざわざ

副読本や教科書を送ってくださり、手紙も下さり、

心に残る優しい先生であった。

遠く田畑を隔てて、となり村からも見える、

この地域で一番の大きな家屋敷に住まわれ、

代々村長さんの家系と聞いていた。

さて、日本で暴走していたトランプ少年は、

かくの如く、小学校３年で立ち直り、

アメリカの少年トランプは７２歳で、

古希を過ぎても、今なお健在で暴走中。

しかし、彼の言っていることは正しいものが多々ある。

意識と実践の間に隙間（遊び）がないだけである。

だが、日本側には、名実ともにそれが備わっていた。

でも、話はそう簡単ではない。

ソロバンの課外授業で、

「ごわさんでねがいましては・・・」と言われ、

初めて聞く奇妙な日本語に闘志が湧く。

飽きっぽいくせに執着心（否、探求心）のある小生。

母親から、常に「その言葉つかいオカシイ」と言われ、

日本語を正されていた小生、

早速、先生に、その言い方はオカシイと。

先生から説明を受けたが、最初から、聞く耳は持たない。

要するに、手先が不器用で、いちゃもんを付けて、

とにかく、ソロバンから逃れたいだけ。

今の国会審議での、いちゃもんだけが武器の、

野党諸氏と同じ。

違いは、こちらは無給にして、潤沢な政経費もなく、

いびり対象の秘書も使途不明金さえない。

しかも、幼くして孤軍奮闘。

ついでに言えば、

野党諸氏は、できの悪い代表とも言える、

返答に窮する大臣諸氏を、これでもか、

これでもかとコーナー間際まで苛め抜き、

その後は、うすら笑いでTV画面に自慢顔で対応し、

これでは、日本から、学校から、社会から、

イジメがなくならないのが理解できる。

野党はまさに「野盗」化し、「金万両」の禄をはみ、

天下御免のイジメの渡世人の集まりで、

その属するシマの内外で、肩で風切る無頼の徒。

「暴対法」の適用除外の安全圏で生息も保証されている。

中には、海外の元締めに巧妙に使われ、

素直で、操り人形のようなのも多々いる。

閣僚時代に、問い詰められると、

「関係ない」「そのような質問が出るのは悲しい」と

逃げ通した二重国籍の女性大臣。

「身も心も日本人」とすり寄り戦術を展開して見せたが、

実態は、身も心も集票パンダ。

さて、この訳けの分からぬ呪文で、

波長の合わぬソロバンとは、

勇ましく「あばよっ！」の縁切り。

小学低学年時代に、この呪文との出会いさえなければ、

時経て、小生は、探求心旺盛な才能をソロバンに注ぎ、

今頃は、「ご破算で願いましてはっ！」と真面目顔で。

開塾していることも想像できるのだが。

ある時、「ええかげんにしなさい！」と母から怒声が。

宿題をせずに遊び、遅く家へ帰り、母にバレたとき。

日本語に厳しい母の𠮟声に違和感が。

宿題をせずに「ええかげん」だったから、

反省しようと身構えたのに、

「ええかげんにしなさい」と逆に命令され、

この言い方はおかしい？と。

質問するような雰囲気ではないまま今に至るが、

この言葉は、深く突き刺さり、まさにトラウマ。

テレビなどでこの言葉を聞くと、この日本語表現は、

理解でき、間違っていないが、正確ではないと思う。

短文化しすぎるのである。

その結果、言い古され、精確ではあるが、正確ではない。

ええ加減（方言）、いい加減、好い（よい）加減は、

肯定的さと否定的さが不真面目に共存しており、

ええ加減な言葉なのである。

さらに、「精確」と「正確」の違いを検索すると、

それなりの記述があるが、どれも「孫引き」である。

世の主流の英語では、明確に定義している。

敢えて、簡単にして厳密・明瞭・正確にすれば、

Accuracy, Accurateが正確、Precision, Preciseは精確、精密。

発音そのものも異なる。

目標の１００点を取る満点生徒は正確で、おまけに、

いつも１００点なら、正確にして精確な子であり、

**いつも低空飛行で**３０点を取る子は精確ではあるが、

正確な生徒ではない。

日本語では、発音も同音であり、紛らわしい。

理系エンジニアなら、これらの定義はお手のもの。

今の日韓問題にも正確さと精確さの葛藤。

正確さを拠り所とする日本と、

正確さ無きため、精確さで逃げる韓国。

裏を返せば、精確さ（しつこさ）に難のある日本と、

正確さゼロのため、精確さ（しつこさ）だけが頼りの韓国。

ヒトラー曰く

「大衆は小さなウソより、大きなウソの犠牲になりやすい」

「ウソを大声で、充分に時間を費やして語れば、

人はそれを信じるようになる」

「熱狂した大衆だけが、操縦可能である」

「政策実現の道具とするため、ウソの繰り返しで、

私は大衆を熱狂させるのだ」

これに忠実な韓国大統領文在寅。

外交では、相手を見極め、

正確さと精確さの二本立てが基本の基本。

「相手が悪い」の強迫型韓国思考への対応を、

疎かにして来た日本と日本人。

「相手に悪い」の気遣いだけ優先の日本型思考。

相手はますます図にのる。決別するのは今。

将来の日本人への禍根を残すことになる。

バカさからの決別のチャンスである。

「ご破算で願いましては・・・」を冷静に念ずれば、

絶妙にして、まことに味のある言葉である。

一語一語に、日本の言葉文化の奥行きの深さも感じられ、

古の人々が、営々として築き上げた歴史の重みがあり、

それが見事に短文で表現されているとも言える。

ところで、これから大挙して押しかける外国人、

日本語習い初めの彼らや彼女らが、

「ええかげんにしなさいよ」と現場で優しく言われたら、

どう反応するか。

さて、お次は、学者先生と称する人達のバカさを正確に分析。

続く　**馬鹿と場華②**へ・・・・・